

陳舜臣さんを語る会通信

NO.145 Oct. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2025年11月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陳舜臣入門講座「陳舜臣さんと神戸を歩こう」を開催して

移情閣(孫文記念館)友の会主催で、7、8、9、10月と、月一で4回、「陳舜臣さんと神戸を歩こう」と題し、兵庫県立のじぎく会館を会場に陳舜臣入門講座が開催されたことは、すでに本通信NO. 144で触れました。本号では、このことについて少し詳しく報告いたします。

1994年、脳内出血で倒れられてからは寡作だったこともあり、「陳舜臣さんって誰？」と問い返されることが多い昨今、神戸を愛し神戸に生きた陳舜臣さんについて一人でも多くの人に知ってもらいたい、陳舜臣について語れる人、フィールドワークのナビゲーターの務まる人が育ってほしいという主催者の願いで、陳舜臣没後10年の今年、当企画は開催されました。講座のテキストには、A5版カラー44ページの冊子、陳舜臣さんを語る会編『陳舜臣さんと神戸を歩こう』を使用しました。右の画像は冊子の表紙です。



【講座名】「陳舜臣さんと神戸を歩こう」

【日時・内容】毎回、午前10時～12時

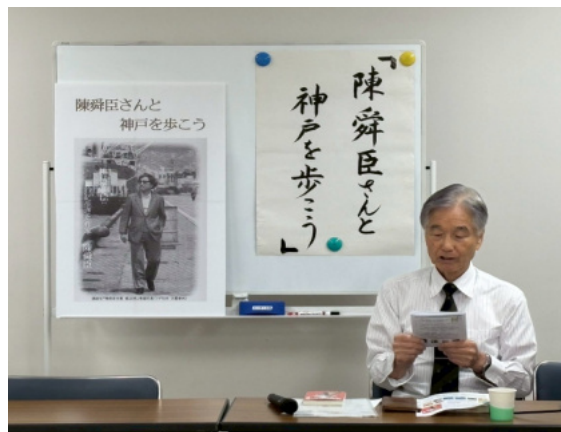
第1回 7月19日(土)「陳舜臣さんって誰？」

第2回 8月16日(土)「陳舜臣さんと神戸を歩こう1」

第3回 9月20日(土)「陳舜臣さんと神戸を歩こう2」

第4回 10月18日(土)「もっと知ろう陳舜臣」

頁	冊子 主な内容
3	Who is 陳舜臣?
4	神戸を愛し神戸に生きた陳舜臣
5-7	陳舜臣さんの引っ越し歴1、2、3
8	三越神戸店 元町通すずらん燈 戦災にも焼け残った装甲ビル
9	トア・ホテル 須磨寺に立つ子規の句碑と陳さんの詩碑
10	『枯草の根』『三色の家』ほか「陶展文もの」の舞台
11	『他人の鍵』『南十字星を…』『隣りはなにを』の舞台 北野町
12	『凍った波紋』の舞台、山本通周辺は陳さん熟知の生活圏
13、14	陳舜臣さんと移情閣(松海別荘、孫文記念館)1、2
15	泰安公司 神戸華僑歴史博物館 陳舜臣アジア文藝館
16	「海軍営之碑」と「海軍操練所跡」記念碑
17	「三本松不動尊」と「私の好きな道」
18	「内海岸通(のちの乙仲通)」及び「旧居留地十五番館」
19	小学生の陳舜臣さんを診察した佐野実病院長
20	神戸市立第一神港商業学校、及び横溝正史生誕地碑
21	陳さん屈辱の出来事 植木市と指紋押捺
22-24	追谷墓地 外国人墓地 華僑社会に生きて
25	陳舜臣さんが再度山に登ったのは太子の森ルート
26	元町商店街付近に残る陳さんの色紙
27	陳舜臣さん生誕地の特定作業
28	1995年1月17日「悲しみを超えて 神戸よ」そして30年
30-41	もっと知ろう陳舜臣 1 祖国、2 コスモポリタニズム、3 年譜、4 T氏の書架



【チューター(講師)】50音順

金川幾久世、橘雄三、前田寿美恵、吉村晴夫

(全員友の会会員)

【場所】兵庫県立のじぎく会館

【参加費】各回千円、冊子代含む

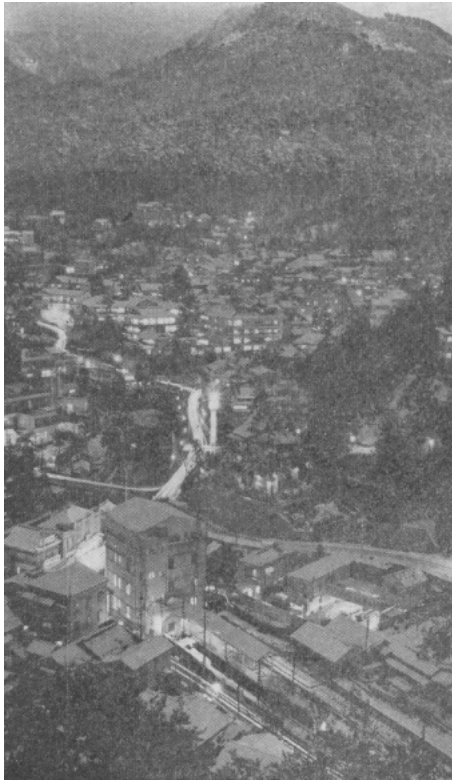
【会場風景】ここにあげました2枚の写真はいずれも第1回の会場風景です。



なお、来年の1月には、フィールドワークを予定しております。

冊子『陳舜臣さんと神戸を歩こう』増補版のためのポイント三つ(1)

有馬温泉



『神戸というまち』掲載
夜景俯瞰写真
下部は神戸電鉄有馬温泉駅

『神戸というまち』
「そぞろ歩き」から

『神戸というまち』は十の見出しからなるが、陳舜臣さんは、その八番目、「そぞろ歩き」の最後に有馬温泉を取り上げています。二枚の写真を入れるとほぼ六頁になる相当な記述です。抜粋引用します。(※)は加筆。

神戸はひろい。六甲を越えてもまだ神戸市内なのだ。

温泉郷「有馬」は、神戸市兵庫区(※現在は北区)有馬町である。有馬は山にとざされているため、おちついた情緒をもっている。

神戸は太陽のいっぱい、あかるい開放的な町であるとのべたが、おなじ神戸でも有馬は裏神戸であって、…。さしずめ有馬は反神戸的な地域といえるだろう。

しなが鳥猪名野を来れば有馬山
夕霧立ちぬ宿はなくして

万葉集巻七

有馬温泉の発見者は、行基上人と伝えられている。

有馬ファンのなかで最も有名なのは、太閤秀吉であろう。記録に残っているだけでも、七回も遊びにきている。千利休やそのほかお伽衆もひきつれての豪遊である。

筆者も有馬へ仕事をもちこむことがある。いまも三十五度の猛暑の神戸の街をとび出して、有馬でこの原稿を書いているところだ。涼しくて気持ちはいいが、あまり快適すぎて、睡くてしょうがない。

五月雨を跡に置きつつ有馬管

鬼貫

講談社『陳舜臣全集23』
「蝉が鳴く」から

作中時間是一九七一年。物語は、推理小説作家の「私」が、有馬温泉に滞在する曹夫人を訪ね、回顧談を聞く場面から始まります。曹夫人は、上海の大富豪張家の娘として生まれ、これも大財閥の曹家に嫁いだ人です。そして、同席した、夫人の息子で曹財閥の後継者曹修耕から、一九三七年、彼が四歳の時、何者かに誘拐され、高額の身代金を奪取されたという事件を聞かされます。このあと、「私」は、曹修耕の依頼で、この事件で、彼の釈放に骨を折ったという、当時の国府軍の青年将校、蔡成器に会いに上京します。

庭で蝉が鳴きだすと、曹夫人は口を噤んで目をとじた。彼女の上品な、かぼそい声は、蝉の鳴き声にもすぐ消されてしまふのである。

私が彼女を訪ねるのは、回顧談をきくためののだ。彼女は上海の大富豪の張家に生まれた。

彼女はことし六十二歳である。辛亥革命はちょうど六十年前であるから、かすかにしろ彼女がおぼえているのは、とうぜん中華民国成立後のことのはずだ。

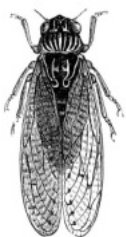
曹夫人は日本滞在の大半を関西ですごす。京都や奈良が好きだったのだ。神戸に泊るときは、有馬温泉の潤泉閣にきめている。

紹介する人がいて、私は潤泉閣に逗留中の彼女と知り合いになった。そして、具体的な小説の材料探しということではなく、かねてから書きたいと思っていた時代の背景を把握する一助にするつもりで、彼女からいろんな話をきくことにした。

上海の張家から曹家へ嫁いだというのは、紹介者のことばを借りると、

――三菱のお嬢さんが、三井家に嫁入りしたようなもの。ということだった。彼女は知らずして歴史の本流の近くにいたのである。

潤泉閣の庭で、また蝉が鳴きはじめた。



冊子『陳舜臣さんと神戸を歩こう』増補版のためのポイント三つ(2)

ふたたびさんたいりゅうじ たいしみち
再度山大龍寺と大師道

大龍寺 燈々池

武夷登山会三十周年を祝う
江戸川乱歩賞 直木賞
受賞作家 陳舜臣

神戸武夷登山会機関誌『三十週年紀念刊』(1969年5月発行)から抜粋引用します。

わが再度山も山上近く到大龍寺がある。弘法大師が二度この山に登ったのが『再度山』の名の由来であるときくが、入唐求法の弘法大師は、中国とは縁が深い。その名僧にゆかりのある再度山に、大ぜいの華僑が登っていることは、なにかの象徴のように思える。

30数年まえに武夷登山会が創立されたとき、私はまだ子どもであったが、父に連れられてよくこの山に登った。再度山は私の少年時代の思い出にもつながるが、この山麓に居を移して2年来、ほとんど毎日登るようになった。

※登山会名、正しくは武^彊ですが活字がないので武夷で代用。

■空海が入唐前の804年と帰国後の二度、摩尼山大龍寺に参詣したので、次第に再度山と呼ばれるようになり、やがて、再度山が正式山号になった。

■[燈籠茶屋]既に廃業
[稻荷茶屋]陳さんの色紙は店に掲示されていました

Aから登るのが大師道。ほぼ再度谷川に沿ったルート

再度山大龍寺

8月に入って最初の土曜日、再度山大龍寺に参詣しました。行きは森林植物園行の市バスを利用し、帰りは諏訪山公園下まで歩きました。

『よそ者の目』『旅にしあれば』から抜粋引用します。

私の家は神戸の再度山の麓にあるので、かんたんに山に登れる。毎朝、約一時間半ほど山歩きをするのが、ここ数年来、私の習慣となっている。同好の士も多く登山会をつくって、山の茶店にノートを置き、登山のたびにサインをして、回数の多さを競う。これは戦前からのしきたりだった。

山頂に近い大龍寺境内に『万回碑』というのがあり、登山一万回に達した人の名を石に刻んでいる。一万回といえ、毎日休まずに登って二十八年はかかる。しかも戦時中は記録がなかったため計算されないの、万回碑に名をつらねた人は、いずれも三十年以上、山に親しんできたことになる。さすがに数はそれほど多くはなく、十人ほどだったと思う。

■確認できた『万回碑』は神戸ヒヨコ登山会のものでした。一人で数会の会員であるのがふつうであったようです(『神戸わがふるさと』『次の世代に伝えよう』参照)



山門(バス停前)



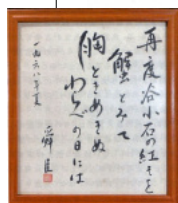
仁王門



大師堂(本堂)
奥の院にも小さな
大師堂がある

燈籠茶屋

稻荷茶屋



神戸山手女子中・高

関西国際大学
神戸山手
キャンパス

冊子『陳舜臣さんと神戸を歩こう』増補版のためのポイント三つ(3)

山本通り(異人館通り) 界限

異人館通りの北側は北野町(二、三、四丁目)で、南側は山本通(一、二、三丁目)。今、ここで話をしようとしている、西から順に、シュウエケ邸は山本通3丁目5-17、北村真珠は山本通2丁目8-13、タカハシパールは山本通1丁目6-20。 ※陳舜臣さんはシュエケと記述。

シュウエケ邸

『神戸というまち』(至誠堂新書 37・38頁)から抜粋引用。

神戸の異人館のなかで最もすぐれたのは、英人建築家アレキサンダー・ネルソン・ハンセルの手になるものが多い。彼は英国王室建築協会(R・I・B・A)のメンバーで、明治二十一年、三十一歳のときに来日し、大正八年、六十二歳で中国に去るまで、三十年あまり、一貫して民間建築家として活躍した。

戦災や改築で、ハンセルの作品はあまり残っていない。だが、彼が自分の住居として建てた家は、幸い現存している。トーア・ロードの西より、山本通り三丁目の道路に面している家である。

現在はシュエケ氏が住んでいて、筆者もいちどなかにはいったことがある。

■当時、ハンセルの事務所は神戸外国人居留地にありました。そのハンセルのもとで、製図者棟梁として仕事をしたのが移情閣の設計者・建築者、横山栄吉だったのです。

詳しくは『呉錦堂を語る会通信』No. 27を参照下さい。

陳舜臣作品に描かれた真珠商

『凍った波紋』には、山本通りに社屋を置く真珠商、作品ではフカミ・パール、が描かれています。

下の地図を見て下さい。陳舜臣宅の近くに村田真珠があり、すが、この村田真珠がフカミ・パールのモデルだと思えます。

『神戸真珠物語』(二〇〇九年 ジュンク堂書店)より抜粋引用 (傍線は加筆)

神戸は六甲山に反射した柔らかな北光線を安定して得られるという利点を持っている。それに加えて、北野町あたりは東西に伸びている地形から、真珠の加工業者が北窓のある作業場を設けやすかった。

今日でも百社を超える真珠業者がこの界限に事務所を持ち、「パールストリート」の名で呼ばれる等、パールシティー神戸の中心になっている。

■「パールストリート」と呼ばれているのは、山本通り(異人館通り)より幾分か南にある東西の通りで、ミキモト真珠などもここにありま。

海外移住と文化の交流センター

※陳さんの記述はトーア・ロードですが、道路標識はトアロード

山本通り(異人館通り)

